

長崎港の概要

◆沿革

長崎港は、1571年ポルトガル船が入港し交易を求めたことで開港されました。その後、1636年に出島、1702年に新地蔵所(現在の中華街付近)などの人工島が築造され、鎖国時代の唯一の海外への窓口として、大きな役割を果たしてきました。

安政の開国以降、東山手・南山手地区などに外国人居留地が造成されると、グラバー商会などが設立され、近代産業の中心として、また明治～大正にかけて、港湾施設や造船所などが整備され、最重要港湾(7港)のひとつとして、上海、大連、北米航路など、西日本の海上輸送の拠点(バンカー港)として発展しました。

戦後、港湾法の制定に伴い1951年に重要港湾に指定され、日本経済の復興とともに、基幹産業である造船業の生産が拡大、港湾取扱貨物も増大し、1970年深堀・香焼間の埋立による工業用地が完成し、100万トンドックなどの大型造船施設の建設が始まりました。

1972年には、外貿施設として小ヶ倉柳埠頭が整備され、その後、毛井首工業用地、皇后埠頭、小江埠頭、神ノ島工業用地が順次完成し、1995年に福田マリナーが完成し供用を開始しました。

一方、内港地区においても、五島列島などとの人流・物流の拠点、県民の交流の拠点として、また「ナガサキ・アーバン・ルネッサンス2001構想」のリーディングプロジェクトとして、1988年に長崎港内港再開発事業に着手し、元船～常盤・出島地区にかけて整備を行い、2003年「長崎水辺の森公園」が完成し供用を開始しました。

また、2009年に10万トン級のクルーズ客船を受け入れる松が枝国際観光船埠頭の完成、2012年にはCIQ機能に特化した「長崎港松が枝国際ターミナル第2ビル」を供用開始、2019年にはクルーズ客船の寄港隻数が延べ2,000隻に達しました。

物流面では、小ヶ倉柳埠頭において、荷役効率向上等を目的にガントリークレーンの供用を2017年に開始、2019年には小ヶ倉埠頭の拡張整備が完了し、貿易拠点として更なる活用が期待されています。

2020年には松が枝地区において、16万総トン級のクルーズ客船が2隻同時に着岸できる「松が枝国際観光船埠頭2パース化事業」に着手し、クルーズ客船受入体制の強化を図っています。

年号	主な出来事
1571	長崎開港(ポルトガル船が長崎入港)
1636	出島完成(国内唯一の国際貿易港)
1859	グラバー埠頭 グラバー資本金設立
1865	大浦天主堂(世界文化遺産)の完成
1868	日本最初の鉄橋(通称つばし)完成 小笠原船渠(通称・そろばんドック)(世界文化遺産)完成
1873	国内における代表的港湾5港の中の1つである1等港に認定
1905	長崎大運送館開設
1923	長崎上海間に日華連絡船丸航就航
1925	長崎大連間に定運船略就航
1930	長崎港駅が開業し日華連絡船と連絡される
1945	長崎市に原爆投下 被爆者を迎える
1947	長崎港を長崎県に移管
1951	重要港湾に指定される
1958	カロニア号がクルーズ客船として初めて長崎港に入港
1985	松が枝国際観光船埠頭の供用開始
1995	長崎港ターミナルビルが完成
2002	長崎出島ハーバー供用開始
2003	長崎水辺の森公園供用開始
2005	女神大橋開通
2009	松が枝地区10万総トン級客船対応埠頭が完成
2010	松が枝ターミナルビル供用開始
2012	松が枝第2ターミナルビル供用開始
2017	小ヶ倉埠頭地区ガントリークレーン供用開始
2018	みなとアシス整備 松が枝地区に16万総トン級客船対応埠頭に延伸
2020	松が枝国際観光船埠頭2パース化事業(16万総トン級×2パース)着手

◆各地区の役割

【常盤地区】

当地区の水辺の森公園は、帆船まつりやベイサイドマラソンなど数多くのイベントが開催されており、県民の憩いの場として親しまれている。



【福田地区】

クルーザー・ヨット等が係留できるマリナーや緑地が整備され、海洋スポーツの場として県民に利用されている。



【小ヶ倉柳地区】

唯一の外貿埠頭として、国際定期コンテナ航路が就航しており、平成29年にガントリークレーンが整備され、利便性が大幅に向上した。また、令和元年には埠頭拡張が完了したことにより、蔵置能力が増え、新たな貿易拠点として期待されている。



【松が枝地区】

16万総トン級客船接岸の接岸が可能。16万総トン級客船が2隻同時接岸可能な2パース化事業を進めている。

